

特定非営利活動法人 福岡高齢者排泄改善委員会
排泄ケア認定証レポート（記入例）

記入日：平成**年**月**日

申請者：*** **

事例報告

年齢：86歳 性別：(男) ・ 女

既往歴：糖尿病 60歳 脳梗塞 79歳

内服薬：エリキユース錠 2.5mg 2錠 1日2回 朝/夕食後
ピソプロロールフマル酸塩錠 2.5mg 0.5錠 1日2回 朝/夕食後
ネシーナ錠 6.25 mg 2錠 1日1回 朝食後

日常生活自立度：✓を入れて下さい

- | | | | | | | | | | |
|-----------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| ・障害高齢者の日常生活自立度(寝たきり度) | 自立 | J1 | J2 | A1 | A2 | B1 | B2 | C1 | ✓C2 |
| ・認知症高齢者の日常生活自立度 | 自立 | ✓ | a | b | a | b | | | M |

事例紹介：

平成26年2月1日脳梗塞を発症され、左片麻痺が残存している。

入院時BI:10点、FIM:45点でADL全介助レベルである。

HDS-R26点。

家族構成は、妻との2人暮らし。キーパーソンは妻。

今後の方向性は自宅退院を希望されている。

本人の希望は「トイレに行けるようになりたい」、また妻も「トイレに行けるようになって欲しい」と希望している。

排泄状況：✓を入れて下さい

- | | | | | | | | |
|------|-------|------|------|----|--------|--------|--|
| ・自立 | 見守り | 一部介助 | ✓全介助 | | | | |
| ・トイレ | ポータブル | 尿便器 | ✓オムツ | 導尿 | バルーン留置 | その他() | |

考えられる問題点：

尿意はあるが、オムツ内に失禁状態（機能性・切迫性）である。

ADL全介助レベルであり、在宅復帰に向けて妻の介護負担が大きい。

自宅トイレの入口が狭く、手すりもない。

排泄状況を改善するために工夫したこと：

チーム（看護師、リハビリスタッフ、MSW）で、トイレでの排泄の確立に向けて計画を立案し取り組んだ。切迫性尿失禁に対しては排尿日誌をつけ、主治医指示にて内服治療（ベシケア）が開始となり、その後も排尿日誌で治療の効果の評価を行った。リハビリでは身体機能の向上に向けての訓練やADL訓練等を実施した。チームで定期的に評価を行い、身体機能の改善に伴い、病棟でのトイレ誘導を検討した。まずリハビリスタッフから病棟スタッフへトイレ動作のデモを行ってもらい、段階的にトイレ誘導（日中 終日）を開始した。また、トイレ動作の介助量が軽減し、軽介助にてトイレ動作が可能となったから、チームで妻へトイレの介助方法を指導した。

退院前にリハビリスタッフとMSWで家屋調査を実施し、トイレは車椅子で入れるように拡大改修（アコーディオンへ変更）とL字手すりの設置を提案した。夜間の排泄はポータブルトイレを使用することとした。

結果：

内服治療とリハビリによる身体機能の改善に伴い、トイレでの排泄が可能となり失禁がなくなった。

（排尿日誌の結果：一回排尿量 140～250ml、残尿量 10～90 ml、一日排尿回数 4～6回）

その為、入院時はオムツを使用していたが、布パンツへの移行が可能となった。また、介護指導により、妻の介助にてトイレで排泄できるようになった。家屋調査後住宅改修を行い、試験外泊を実施したが、問題無く行えた。

考察：

内服治療とリハビリによる身体機能の向上により尿失禁が改善できたと思われる。また、トイレでの排泄の確立に向けて、チームで計画を立案し、ケアを展開させたことで目標が達成できた。在宅復帰を目指す上では、患者・家族の在宅生活を考慮した上での環境設定や指導が重要となる。